



研究者としてのオリジナリティを探す

弘前大学川上先生からバトンを受けました、東北大学理学研究科の佐藤雄介と申します。このようなエッセイを書く機会は初めてなので、自己紹介がてらこれまでの研究生活で考えてきたことをいくつか話していきたいと思えます。

私は徳島県の高校を出た後に、東北大学に入学し、大学3年生の秋に寺前紀夫教授の研究室に配属されました。配属したタイミングで核酸塩基と結合する蛍光プローブを用いたDNA一塩基多型解析法の開発研究がCRESTに採用されたこともあり、私は小分子プローブの置換基効果に関する研究をスタートさせました。おそらく研究室配属直後の寺前先生とのインタビューで有機合成が苦手と伝えたこともあり、相互作用解析・測定をメインテーマにしてくれたのだと思います。その後、ちょうど博士号を取る年度に助教のポストが空いたため、そのまま助教で採用していただいて現在に至ります。

この間に研究対象がDNAからRNAにシフトし、最近では細胞内RNAやRNAを内包する小胞（細胞外小胞）の分析をメインテーマで研究を進めています。私が博士課程のころに、ある先輩から「オリジナルの研究をするためには研究環境（研究室）を変えて幅広い視点を持つべき」と言われたことがありました。ポスドクを経験せずにそのまま同じ研究室で助教になった自分にとって、この言葉は常にひっかかっており、助教になって数年間も「どうやったらオリジナルの研究ができるのか？」と悶々と考えていました。私は自分なりの答えを得るために、今進めている研究プロジェクトに限らず、常にアンテナを張って情報収集することをしてきました。具体的には分析化学会だけでなく他の分野の学術会議への参加や、意図的に様々な論文・文献を検索し読む時間を設けて、得られた情報や知識をPowerpointにまとめてネタ帳（ネタファイル？）を作っていました。そうすると、それぞれの研究課題に共通する問題点が見えてきたり、自分の進めているプロジェクトから問題解決の糸口が見つかったりしました。自分で考え抜いて思いついた研究テーマはやはり思い入れが違います。やりたいことが明確になると、学生時代苦手だった有機合成にもやる気が出てきて、手を動かさせられます。少しずつですが最近はいろいろな分子が合成できた時、合成した分子が機能した時の喜びを楽しめるようになってきました。この

ように進めた結果、私の場合は研究対象が広がっていくとともに、研究手法が変わっていくことになりました。ただすべての研究テーマの中で、「面白い結合機能・検出機能を持つ分子プローブを創出する」ことは共通しています。その折々で考え続けて動いてきた上で、共通したこのことこそが私の研究者としてのオリジナリティにあたると思います。研究者のキャリアは様々でどれが良いと判断することは難しいし、思い通りにならないことばかりですが、縁があって与えられた環境で精一杯もがきチャレンジすることが結局は大事、という当たり前のことを改めて実感しました。ネタ帳の中ではいまだに眠っている研究テーマの種がまだまだあり、これらすべてが日の目を見ることになるとは思いませんが、できるだけ頭の中をフレッシュにして、ネタ帳をアップデートし続けていくことが大事だと思っています。最近では「こんなプローブ作れる？」とお誘いを受けて、自分では思いもよらない研究分野に参画することも増えてきました。こうしたチャンスを逃さずに、分析化学に軸足を置き新しい分野を学べることを楽しんでいければと思っています。

これまでの研究生活を振り返ると、やはり学会に参加して発表を聞いたり、お酒を飲みながら情報交換することは本当に重要だと改めて感じています。特に同世代の研究者との交流は私のモチベーションアップにつながるため、分析討論会・分析年会の参加は毎回楽しみにしています。コロナ禍のためオンライン学会に参加できない状況はとても辛く、できるだけ早くコロナが収束し研究者との交流を通じた刺激が得られる機会が来ることを願っています。

次の執筆者は熊本大学先端科学研究部の北村裕介先生です。北村先生とはバイオ分析の中でも核酸を対象にした研究という共通点もあり、学生の時から仲良きさせてもらっております。北村先生はとても情報通で、学会でお会いするたびに国内外の色々なラボや先生方の新しい情報を知れるので、毎回楽しくお話をさせていただいています。北村先生はいつもニコニコされて社交性も高く、私が懂れている先生のお一人です。今回の寄稿について打診した際にも、大変ご多忙中、快くお引き受けいただきました。どうもありがとうございます。北村先生のエッセイを楽しみにしております。

〔東北大学大学院理学研究科 佐藤雄介〕